

当日は、爽やかに晴れ渡り、雲一つない快晴。予報では風が強くなるというのですが、雨よりはいいだろうと思いました。数々の電車が発着する中で、小川町行きの特急も入線している。東武池袋駅の改札口は南、北、中央口の3ヶ所があり、集合場所を決めて置かなかったので、乗った処はまちまちでしたが、先方に到着すれば会えるだろう、と電車に乗り込んだ。眩しい光に包まれた都会の市街地を電車はヒタ走り駆け抜けて、川越まではノンストップで30分で到着した。それから、坂戸、東松山と停まり、最後の月の輪、武蔵嵐山等は各駅に停って、終着駅小川町に予定通り到着。

南口からのった8人について、中央口から乗った皆藤、高野、高山さんが見え、続いて、友人を2人連れて来ると言った若山宏(昭33年)さんも、木口健児さん、田中丸正治さんと一緒に見えて、全員無事勢揃いした。これよりタクシーに分乗して、埼玉伝統工芸会館に走った。

見学者は私達だけのようだった。ここで、この地に1200年伝わるという、伝統工芸士による「手漉き和紙」の実演を見学し、その隣は常設の展示室で建具や人形、織物、釣竿、武州瓦など埼玉県指定の伝統的手工芸品30品目を見ることが出来ました。企画展示室では、女子美術大学立体アート紙の仲間達による「仲よし展」が開かれており、女子美の教授と生徒が、小川和紙産地の紙素材を通して、アートな紙造形の作品を製作し、人と技術の交流を企画したと言うものでした。企画実演室では、老工が独り静かに根付けの製作ををしておりました。僅か2~3cmの象牙の生地、細かい彫刻が施されて、素晴らしい芸術品が誕生する。これも埼玉の伝統工芸とは始めて知りました。

ここで、独り車で来られた酒井隆二(昭31年)さんが参加し、一緒に見学して一通り見学の後、併設されている道の駅おがわまちの物産館に入り、お土産を求めた。小川町特産の和紙を始め、染め物、織物、雛人形、羽子板、鬼瓦、竹釣竿、桐製品、だるま、鯉幟など、伝統的手工芸品や近隣の銘酒や漬物など、この地の特産品を販売しておりました。皆さんの買い物が済んだ頃、11:10にタクシーを呼び、それぞれ分乗して「晴雲酒造」に向かい、直ぐに到着したが、3人を乗せて先に出た酒井さんの車が到着しないので、店の前で暫く待った。皆さんの揃ったのを見て、お店に入る。筧から流れ出る仕込み水を口に含み、蔵に入って中山雅義社長より、酒の工程の説明を聞き、1ヶ月前に仕込んだのを今丁度搾って居るといふ隣の蔵に入り、社長は垂れ口から流れ出る粗走りを唸かせてくれた。何とも吟醸香の奥ゆかしい香りが強く、そしてその濃い旨味、この一口で今日蔵を訪ねたすべての目的が達成されたようだのように思われた。再び店に戻り、健太郎さんの説明で、4種類のお酒を唸酒して、お土産のお酒を購入した。蔵を出る時に、会から皆さんへお土産に純米酒「晴雲」の四合瓶一本が配られた。

『永徳屋』は蔵から歩いて2~3分の距離だった。小さな店に見えたが、二階に通されると、広い部屋が幾つかあり、手前の部屋では既に大勢の会合がなされている模様だった。

会長挨拶の後、恒例の新人が行う乾杯で木口健児さんが音頭をとり、宴席に入り、途中、高山さんが立って愛知万博宣伝の飛行船の話をして、最後はやはり新人田中丸正治さんが会を締めて無事本日の会はお開きになりました。